

虹色の羅針盤

地域未来共創論

岡谷下諏訪は世界最先端モデル都市
に飛翔する可能性に満ちている。



藤森 弘

序章

迷いと苦難の夜明けに ― 私たちはもっと「楽」に生きていい

はじめに、あなたに一つだけ質問させてください。今、あなたは心から笑えていますでしょうか。

もし、即座にはいと答えられなかったとしても、どうかご自身を責めないでください。毎日を懸命に生きているのに、なぜか心が晴れない。先の見えない不安や迷いに押しつぶされそうになり、生きる勇気を見失いそうになる夜があるかもしれません。それは決して、あなたの努力が足りないからではないのです。

私たちは今、まるで分厚い灰色の雲の下にいるかのようです。社会全体が余裕を失い、頑張れば必ず報われるというかつての神話は薄れ、代わりに自己責任という少し冷たい言葉が飛び交うようになりました。そんな現代において、無邪気に心から笑って過ごすことは、大人にとっても本当に難しいことになってしまったのです。

しかし、だからこそ私は、この本を通じてあなたにお伝えしたいことがあります。それは、我慢し耐えればいつかいいことがあるなどという気休めではありません。その分厚い雲を払いのけ、温かな太陽の光を浴びるための具体的な道しるべです。

私たちはこれまで、苦勞することこそが美德であり、歯を食いしばって耐えることが美しいと教えられてきました。現代社会は、私たち庶民にあまりにも多くの我慢を強いてきたように思います。でも、あえて言わせてください。もう、そんなに苦しまなくていいのです。私たちは今こそ、我慢の人生から、楽しいと実感できる人生へと舵を切るべき時に来ています。もっと楽に生きていい。もっと楽しいと笑っていいのです。

私は、「生活が楽になり、住んで楽しいまちづくり」という意味で「楽(らく)の政治」を提唱して来ました。

議会活動や地域づくりの現場を歩く中で、私は痛感してきたことがあります。それは、庶民の笑顔と元気こそが社会を動かす真の力であるという事実です。災害で街が暗く沈んだとき、子どもの笑顔が人々の心を照らし、病床にあった高齢者が孫の明るい声に応えて表情をほころばせる。そんな小さな笑顔が、人の心に希望の炎をともしのです。

そこには、苦難福門という真理が息づいています。苦しみの門をくぐり抜けた先にこそ、新しい希望が開けるという意味です。今、あなたが抱えている迷いや苦難は、決して無意味なものではありません。それは、新しい扉を開くための大切な鍵なのです。だから私は、笑顔と元気を社会の基盤に据えたいと強く願っています。

では、どうすればその樂を手に入れ、心からの笑顔と元氣を取り戻せるのでしょうか。

その答えを導く希望の光、人生の進むべき道を示す羅針盤が、実は長野県のほぼ中央に位置する、岡谷市と下諏訪地域に隠されています。豊かな自然と最先端のテクノロジー、そして温かな人情が交差するこの場所には、私たちが人間らしく、そして樂に生きるためのヒントが無数に散りばめられているのです。

ここから先は、少し肩の力を抜いて、温かいお茶でも飲みながら読み進めてみてください。これは、重たい荷物を下ろして、あなたがあなたらしく生きるための、そして私たちが共に豊かな未来を創るための、新しい冒険の始まりです。

第 1 章

「奇跡の湖都」岡谷下諏訪 ― 天の時と地の利が交わる生命のゆりかご

湖に育てられた町があります。山に守られ、川に導かれ、そして風に試されてきた町、それが岡谷と下諏訪です。この二つの町は、まるで姉妹のように並び、ともに諏訪湖のほとりに寄り添いながら、信州の豊かな自然と深い歴史を刻んで歩んできました。

周囲を見渡せば、岡谷下諏訪の地域の三分の二は深い緑をたたえる森林に覆われています。そこには爽やかな高原の風が吹き抜け、こんこんと湧き出る温泉が日常の暮らしに静かに溶け込んでいます。

こうした豊かな住環境の快適性は、ただ美しいだけでなく、私たちの心と体を根源から癒やしてくれます。澄んだ空気を胸いっぱいに取り込み、清らかな水に触れ、静けさの中で自分の鼓動を感じる。これらはすべて、地球が長い時間をかけて育み、私たちに無償で提供してくれている豊かな環境資本なのです。

私たちが生きるこの星は、古くから“水の惑星”と呼ばれてきました。しかし現代において、地球はかつてない深刻な危機に直面しています。地球温暖化による気候変動は、生命の源である貴重な淡水(真水)を容赦なく奪い去っているのです。

著しい経済成長を遂げるインドを例証として見つめてみると、過酷な熱波と降雨パターンの変化により、大地を潤すはずの地下水が次々と干上がっています。数億人の人々の生活用水や農業

用水が枯渇の危機に瀕しており、水不足はもはや遠い国の対岸の火事ではなく、地球規模の生存を揺るがす喫緊の課題となっています。

さらに、私たちがこれから迎える新しい産業革命や高度なデジタル社会においても、この「水」の問題は避けて通れません。AI の進化を支える基盤として世界中で急速に建設が進む AI データセンターですが、その膨大な情報処理に伴って発生する熱を冷却するために、実は必要不可欠なものとして大量の真水が消費されているのです。

現在、世界のデータセンター部門全体では年間 5,600 億リットル以上の水を消費しています。国際エネルギー機関(IEA)の予測によると、この水消費量は 2030 年までに 1 兆 2,000 億リットルにまで急増する可能性があります。

さらに、AI インフラストラクチャに限定した世界資源研究所(WRI)の推計では、2030 年までに AI インフラが年間 1.1 兆～1.7 兆ガロン(約 4.1 兆～6.4 兆リットル)の真水を消費すると予測されています。これは、米国カリフォルニア州の全世帯が 1 年間に消費する水量に匹敵する極めて膨大な規模です。

私たちが享受する最先端のテクノロジーは、皮肉なことに、最も物理的で原始的な「真水」という資源に深く依存しています。高度な冷却装置を稼働させるための真水が不足すれば、AI の進化そのものが立ち止まってしまうリスクすら孕んでいるのです。

こうした厳しい現実を直視したとき、一つの明確な未来が見えてきます。それは、真水がこれまで以上の価値を帯びる時代が、もう目前に迫っているという事実です。石油を巡って世界の覇権が争われたように、これからの時代は「安全で豊かな真水を安定して確保できるか」が、地域や国家の絶対的な価値を決定づける条件にさえなるかもしれません。

この新たな世界の潮流の中で、改めて岡谷と下諏訪の地を見渡してみてください。この地には、世界が喉から手が出るほど欲しが、貴重かつ希少な真水の「水源」が豊かに満ちあふれています。私が、岡谷下諏訪が「世界最先端モデル都市」としての可能性があふれていると主張する最大の理由は、この地域は世界中がうらやむ豊かな「水源都市」であるという、揺るぎない事実にあります。

この潤沢な真水と深い森の恵みは、人々の精神性をも育んできました。諏訪湖の周辺には、古くから神秘的な龍神の伝説が語り継がれています。水、火、土、風といった自然の力を象徴する精霊たちが、この地を優しく見守り、息づいているかのような空気を感じることができるでしょう。

愛と夢、そして優しさをテーマにした物語が今にも生まれそうな、すべての生命の尊厳を肯定する温かな空気が、この湖畔には満ちているのです。

そして、この豊かな水に抱かれながら、岡谷と下諏訪はものづくりの知性を脈々と育んできました。明治から昭和にかけて、岡谷は東洋のマンチェスターと呼ばれるほど製糸業で栄え、日本の近代化を力強く支えました。生糸を紡ぐために不可欠だったのも、また清らかな真水でした。

その輝かしい技術と商業の波は隣の下諏訪にも伝わり、やがて精密機械工業という新たな息吹へとつながっていったのです。戦争の時代を経て、この地には大都市の工場が疎開し、東洋のスイスと称されるほどの精密産業の聖地へと変貌を遂げました。

今もなお、この地には世界最先端の超微細加工技術が息づいています。しかしそれは、自然を征服し、破壊して得られたものではありません。古代から人間は水辺に集落を築き、文明を育ててきました。水は命であり、交流であり、境界ではなく結び目でした。諏訪湖もまた同じであり、産業も観光も文化も、すべてがこの湖という豊かな水源から始まり、この湖へと還っていくのです。

圧倒的な自然の恵み、すなわち真水の環境資本と、人々のたゆまぬ努力と創意工夫が交差する場所。人為と自然が見事に調和する「奇跡の湖都」こそが、岡谷下諏訪なのです。

過去の記憶も、今の風景も、そしてこれからの希望も、すべてが共に息づいているこの場所には、私たちが人間らしく、そして楽に生きるためのヒントが詰まっています。

真水が価値を持つ時代において、枯渇する世界に希望を示すこの「水源都市」は、これからの時代を照らし、迷える人々を導く世界最先端のモデル都市となる可能性を大いに秘めている、と私は思うのです。

第2章

「楽」の政治と生活者保守主義 ― あなたの食卓を守り抜く

テレビやインターネットのニュースを眺めていると、右派と左派が互いの正しさを主張し合い、終わりのない論争を繰り広げている光景によく出くわします。しかし、そうした声高なイデオロギーの対立を前にして、どこか心が置き去りにされているような、冷めた気持ちになったことはないでしょうか。

私たちが本当に気にしているのは、高尚な政治理論や勇ましいスローガンではありません。来月の生活費はどうなるのか、子どもたちは安心して学校に通えるのか、そして今日の食卓に並ぶご飯は美味しいか。そんな、ごくごく当たり前の生活のことです。

どれほど立派な理想が語られたとしても、私たちの食卓から笑顔が消えてしまっては、何の意味もありません。だからこそ私は、空の上で飛び交う議論を見上げるのはやめて、私たちがしっかりと立っている生活という大地に視線を戻そうと提案したいのです。

そこで鍵となるのが、生活者保守主義という考え方です。保守と聞くと、現状維持や古いルールに縛られているようなイメージを持つかもしれませんが、しかし、私がここでお伝えしたい保守は、それとは少し違います。小さい頃から通っている近所のお店がなくなってほしくないと思う気持ちや、家族と囲む温かい食卓を壊したくないと願う心。かけがえのない大切なものを守り抜こうとすることが、本当の意味での保守の原点なのです。地に足をつけて庶民の暮らしを守り抜く姿勢にほかなりません。

国家の威信や政党のプライドではなく、あなたの毎日の食卓を守る。明日のパンの値段を気にする。それは決して恥ずかしいことではなく、地に足の着いた最も真っ当な政治感覚です。

地域づくりは人づくりであり、教育は未来づくりです。暮らしの安心があつてこそ、人は夢を描き、子どもたちは未来へと踏み出せます。庶民の笑顔と元気こそが社会を動かす真の力なのです。私たちの生活を豊かにするためには、この生活水準を向上させるという強い意志と、それを実現に導く問題解決力、そして粘り強い交渉力が不可欠です。

そして、政治とは本来、国民を楽にするためにあるものだとは私は信じています。生活が楽になる。将来への不安が消えて、気持ちが楽になる。私たち庶民が眉間のシワをほどいて、この町に住んでいてよかったと笑い合えること。それこそが政治の本来の目的であり、到達すべきゴールです。苦役のような毎日を強いる政治など、本来あってはならないのです。

では、どうすればこの楽の政治を実現し、私たちの声を社会に届けることができるのでしょうか。そのための最強のパートナーが、人工知能、すなわち AI です。

AI と聞くと、少し難しそうに感じたり、仕事を奪われるのではないかと不安に思ったりするかもしれませんが、実は AI が私たち庶民にとっての心強い味方になるのです。これまで、政治や行政の複雑な仕組みは、難解な法律用語や手続きという壁に守られ、一部の専門家やエリートたちに独占されてきました。しかし AI があれば、難しい書類も複雑な条例案も、一瞬でわかりやすく翻訳してくれます。

もっとこうしてほしいというあなたの小さな声を、AI が論理的な政策提言へとまとめてくれる。私はこれを、テクノ・デモクラシーと呼んでいます。一部の強い声だけが通るのではなく、技術の力を使って一人ひとりの小さな声を丁寧に拾い上げる、新しい民主主義の形です。AI は、一部の人が持っていた特権を解体し、すべての人に知の力を与える魔法の杖のような存在なのです。

私たちは今、政治家やお役所任せにするのではなく、私たち自身が AI というパートナーと手を組み、自分たちの住む町を自分たちでデザインしていく「共創の時代」に生きています。一部の権力者ではなく、私たち庶民が主役となるのです。

さあ、難しい顔をして議論するのではなく、楽しく、そして楽に、未来を描いていきましょう。あなたのささやかな日常を守り抜くための新しい冒険は、もうすでに始まっています。

第 3 章

共生進化とフィジカル AI — 人と機械が響き合う温かな未来

AI という言葉が私たちの日常にあふれるようになってから、ほんの数年しか経っていません。ニュースやインターネットを見れば、AI はまるで魔法のような存在として、あるいは私たちの仕事を奪う脅威として語られることが多くなりました。確かに、画面の中で文章を紡ぎ出し、鮮やかな画像を描き出すデジタルの力は目覚ましいものです。しかし、どうか安心してください。AI は決して人間から仕事を奪う敵ではなく、私たちの頭脳と身体の延長として、共に働く心強いパートナーなのです。

私たちがこれから迎えるのは、冷たい機械が支配する世界ではありません。いま、世界で注目されている新しい概念があります。それがフィジカル AI です。これまでの AI がデジタルの世界に閉じこもっていたのに対し、フィジカル AI はカメラやセンサーを通じて現実世界を見て、感じて、判断し、実際に身体を持って行動します。

たとえば、工場で部品を組み立てるロボットが、周囲の状況を自ら観察し、最も効率的で安全な動きを瞬時に判断して動くような姿を想像してみてください。そこにあるのは、単に命令された通りに動く機械ではなく、考える働き手としての新しい知能です。

このフィジカル AI が、岡谷や下諏訪の町で心ある新たな産業革命を起こそうとしています。なぜ東京のような大都市ではなく、この湖畔の町なのでしょう。その理由は、この町が長い歴史の中で育んできた共働きの精神にあります。

明治の時代、岡谷が製糸王国として世界中に絹を送り出していた頃、その背景には数多くの家族工場と協働の精神がありました。機械を回すのは人の手であり、その手を動かすのは誇りでした。男も女も、年寄りも若者も、それぞれの役割を超えて支え合い、学び合い、励まし合いながら糸を紡いできたのです。誰かが欠けても機械が止まってしまうからこそ、互いに声を掛け合い、失

敗を責めず、成功を分かち合う。競争よりも共創を大切にする文化が、この町には息づいています。

この共働の遺伝子は、AI 時代において最も重要な基盤となります。現代の工場では、若いエンジニアがロボットに動きを教え、熟練の職人がその様子を温かく見守りながら助言を与える光景が見られます。AI はその微細な違いを記録し、学習を重ねていきます。人が AI を育て、AI が人を育てるという新しい関係性が、かつての製糸工場で女工たちが機械と心を通わせていたのと同じリズムで響き合っているのです。

私たちが目指すのは、単なる自動化や効率化ではありません。AI が作業を代行するのではなく、人と共に考え、人を成長させ、人が AI を成長させるという共創の形です。ロボットが自ら判断し行動する自律化の時代において、私たち人間に求められる役割はより明確になります。それは、人が心を担うということです。AI が頭脳を持ち、ロボットが手足となって動くとき、私たちがそこに心を通わせることで、三位一体となって社会は温かさを取り戻すのです。

岡谷や下諏訪の職人たちが弟子を育てるとき、最初に教えるのは技ではなく、ものを大切に扱い、仕事は誰かの幸せにつながるという姿勢でした。この職人の倫理こそが、フィジカル AI 時代の中心に据えられるべきものです。AI のアルゴリズムが効率や利益だけを追求するようになれば、機械はやがて人間を疲弊させる存在になってしまうでしょう。しかし、そこに共生や誠実、安全といった思いやりや倫理が組み込まれば、AI は人を助けるやさしい道具に変わります。

すべての人が生きる尊厳を感じられる社会をつくるために、私たちは AI をどのように使うべきかを問い続けなければなりません。AI がどんなに賢くなっても、誰のために、何のために使うのかという目的を定めるのは常に人間です。人の幸福を中心に据えたテクノロジーの活用があってこそ、地域社会は真に豊かになります。

冷たいと思われがちな AI ですが、実際の現場で見つめると、それは人間の情熱と知恵を映し出す鏡のようでもあります。人間の曖昧さや誠実さ、観察力がそのまま AI の振る舞いに反映されるのです。だからこそ、AI は人間を置き換えるものではなく、私たちの本質をより深く理解させてくれる存在と言えるでしょう。

岡谷と下諏訪の町には、今も人の手の温もりが残っています。街角の小さな鉄工所や精密加工の現場に立つ人々のまっすぐな眼差しに、フィジカル AI は新しい光をもたらします。職人の研ぎ澄まされた勘と AI の高度な演算が出会い、互いに敬意を払い合う世界。人と機械が響き合い、共生進化を遂げていく温かな未来が、この湖畔の町から確かに始まりつつあるのです。

第4章

対話と交流が紡ぐ「人の和」——虹色の架け橋を渡って

雨上がりの空を見上げたとき、そこに美しい虹がかかっているのを見つけると、私たちは誰もがふっと心を和ませ、自然と笑顔になります。無色透明の太陽光がプリズムを通して7色に分かれるとき、虹は静かにその姿を現します。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫。互いに異なる色が響きあい、重なりあって初めて調和の美を放つその光景は、まるで人と人との関係を映し出すかのようです。

私たちの生きる社会は、決して単色で塗りつぶされるべきものではありません。多様性に支えられて存在しているからこそ、対立するのではなく、共に生きる共生の中に希望を見出したいと私は強く願っています。それぞれの色の違いを間違いだと否定するのではなく、違いを認め合い、互いを引き立て合いながら一つの大きな橋を架ける。これを私は、「虹の政治哲学」と呼んでいます。虹は多様性の尊重と平和のシンボルであり、私たちの未来へと続く希望の架け橋でもあるのです。

この「虹の政治哲学」を体現する舞台として、長野県の岡谷と下諏訪ほどふさわしい場所はないでしょう。古くからこの湖畔の町には、義理と人情に厚い地域性が深く根付いています。人々は互いに助け合い、喜びも悲しみも分かち合いながら、豊かな、そして時に厳しい自然の中で命をつないできました。そこにあるのは、自分さえよければいいという孤立ではなく、他者を思いやる温かな人の和です。

諏訪の湖には古くから壮大な龍神の伝説が語り継がれていますが、その物語の根底にも、命の尊厳を何よりも重んじ、自然と人が調和して生きるという深い教えが流れています。水、火、土、風といった自然界を構成する精霊たちのように、それぞれまったく異なる性質や役割を持つ人々がこの地に集い、互いを尊重しながら共生してきたのです。愛と夢、そして優しさという普遍的なテーマが、この地域の歴史と人々の暮らしの中には確かに刻み込まれています。

現代社会は、ともすれば意見の違いや立場の違いから分断や摩擦が生まれやすい時代です。しかし、異なる価値観を恐れるのではなく、根気強く対話と交流を重ねること。それこそが、揺るぎない信用と信頼を育み、争いのない平和の礎となります。岡谷と下諏訪の人々は、長い歴史の中でその対話の重要性を身をもって学んできました。違う文化や背景を持つ人々を排除するのではなく、あたたかく包み込み、学び合いの糧としてきたのです。

私は、こうした対立や暴力ではなく、共生と調和によって未来を切り拓く人々の姿を、新人類と呼びたいと思います。新人類とは、国境や宗教、民族の違いによって争うことを選ばない人々のことです。互いの差異を豊かさとして受け入れ、技術や知恵を分かち合いながら、地球という生命圏

を守ろうとする尊い存在なのです。そして、この新人類による共生進化の萌芽を、私はまずこの岡谷下諏訪の地域から育てていきたいと心から願っています。

異なる年代、異なる職業、異なる価値観を持つ人々が、AI という新しい技術も交えながら、同じテーブルについて未来を語り合う。そこには、誰かを打ち負かすための冷たい議論ではなく、どうすればみんなが楽に、楽しく生きられるかという温かい対話があります。その対話と交流の積み重ねこそが、地域を再生させ、新しい価値を共創していく最大の原動力となるのです。

一人ひとりが持つ固有の色は、決して他の色を打ち消すものではありません。あなたが持つその色も、隣の人を持つ色も、この世界には欠かせない大切な光なのです。どうか、あなた自身の色を誇りに思ってください。そして、他者の色を美しいと讃える心を持ってください。

虹の彼方に広がる未来とは、まさにこの「共生進化」を選び取った新人類の姿にほかなりません。岡谷と下諏訪という奇跡の湖都から始まるこの虹色の羅針盤は、私たちを必ず、多様な光が調和しあう平和な世界へと導いてくれます。さあ、手を取り合い、対話という名の糸を紡ぎながら、ともに虹色の架け橋を渡っていきましょう。

第 5 章

虹色の羅針盤 ― 世界最先端モデル都市に向けて出航

ここまで、岡谷と下諏訪という豊かな自然に抱かれた土地の魅力、私たちの日常を守り抜く楽の政治、人と機械が響き合うフィジカル AI の温かな未来、そして対話と交流が紡ぐ人の和について、皆さんとともに思いを巡らせてきました。これらの要素は、決してばらばらに存在しているわけではありません。すべてが深く結びつき、互いに影響を与え合いながら、一つの壮大な未来図を形作ろうとしています。それこそが、自然環境と最先端のテクノロジー、そして温かな人情が完全に一体となった、新しい都市の姿である湖都モデルの完成形です。

少しだけ、目を閉じて想像してみてください。美しい諏訪湖のほとりに、緑豊かな森と澄んだ空気が広がる町。そこでは、最新の AI やロボットが冷たい機械としてではなく、人間の優しさや倫理を学んだ心強いパートナーとして、私たちの暮らしや仕事を静かに支えています。お年寄りはテクノロジーの温かいサポートを受けながら住み慣れた家で安心して暮らし、子どもたちは豊かな自然の中で最先端の技術に触れ、目を輝かせて学んでいる。そして、町を行き交う人々は、年齢や立場、背景の違いを超えて、互いに笑顔で挨拶を交わし、対話を楽しんでいる。これこそが、私たちが目指す未来の都市の姿なのです。

岡谷と下諏訪は、かつて行政の枠組みや歴史的な背景から、隣り合いながらも時に見えない境界線を引いてしまうことがありました。しかし今、両町はそうした過去の分断を乗り越え、互いの違いを尊重し合いながら、ともに未来を描こうと手を取り合っています。この融合こそが、争いや対立を終わらせ、共生進化を選び取った新人類のモデルケースとなるのです。

新人類とは、国境や文化、価値観の違いによって争うことをやめ、互いの差異を豊かさとして受け入れ、地球という生命圏を守ろうとする人々のことです。岡谷と下諏訪の地で、技術や知恵を分かち合い、助け合いながら生きていく人々の姿は、まさにこの新人類の生き方そのものです。

そして、この湖畔から育まれる新しい生き方や社会のモデルは、決してこの地域だけのものにとどまりません。現代社会には、先行きが見えない不安や、分断による孤独、過酷な競争に疲弊し、暗闇の中で迷っている人々が数え切れないほどいます。そんな日本中、いや世界中の迷える人々にとって、岡谷と下諏訪の挑戦は、希望の光を放つ「虹色の羅針盤」となるはずです。

羅針盤が常に正しい方向を指し示すように、この「奇跡の湖都」が示す共生と共創の道は、私たちが本来向かうべき人間らしく豊かな未来の方向を、決してブレることなく教えてくれます。自然を搾取するのではなく共存し、テクノロジーを一部の人の利益のためではなくすべての人の幸せのために使い、多様な人々が手を取り合って生きる。その虹色の光に導かれれば、私たちはどんな深い霧の中でも、希望に満ちた岸边へとたどり着くことができるでしょう。

いま、新しい風が湖面を吹き抜け、私たちの乗る船の帆を大きく膨らませようとしています。過去の重たい荷物や不要な我慢は岸に置いて、ただ希望と勇気だけを胸に抱き、この世界最先端モデル都市から、ともに新しい未来へと出航しましょう。その航海は、時に波に揺れることもあるかもしれませんが、私たちの手には虹色の羅針盤がしっかりと握られています。だからもう、恐れることは何もありません。私たちが向かう先には、誰もが心から楽しいと実感し、笑顔と元気に満ちあふれた、輝くような虹の彼方が必ず待っているのですから。

終章

笑顔と元気を虹の彼方へ

ここまで、長い旅にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。序章で私があなたに投げかけた、一つの小さな問いかけを覚えていますでしょうか。今、あなたは笑っていますか、というあの言葉です。

この本を読み終えようとしている今、あなたの心には、どのような景色が広がっているでしょうか。本を開く前に空を覆っていたあの分厚い灰色の雲は、少しは晴れ間を見せたでしょうか。もし、雲の切れ間から一筋でも優しい光が差し込み、あなたの心が少しでもふっと軽くなっていたとしたら、筆者としてこれほど嬉しいことはありません。

私たちが生きるこの社会は、時に冷たく、生きる意味や命の尊厳を見失いそうになることもあります。しかし、あなたの命には計り知れない価値があり、誰もが心穏やかに、平和に生きる権利を持っています。岡谷と下諏訪という「奇跡の湖都」が教えてくれたのは、競争して誰かを傷つけるのではなく、ともに手を取り合い、楽に生きていくという温かな希望の形でした。

空にかかる美しい虹は、どこか遠くの魔法の国にだけ現れるものではありません。虹は、無数の小さな水滴が集まって生まれます。そして、その光を反射して輝く一粒一粒の水滴は、まぎれもなく、今ここにあるあなた自身の命なのです。あなたという尊い存在がいて、隣に違う色を持つ誰かがいて、そこに対話という光が差し込むとき、私たちの足元から虹は静かに立ち上がります。

何か大きな社会変革を今日すぐに成し遂げなければならないと、焦る必要はありません。隣の人に笑顔で挨拶を試みる。湖を渡る風の心地よさに目を向けてみる。そんな日常のささやかな行動の一つひとつが光を反射し、やがて大きな虹の架け橋となって、この町を、そして世界を優しく覆っていくのです。

人類は戦争や対立という古い時代の残響から決別し、共生と調和によって未来を切り拓くべき時に来ています。私は、虹の彼方には、多様な光が調和しあう世界が必ず開けると信じています。それぞれの色が互いを尊重し、響き合うその場所は、決して手の届かない幻ではありません。私たちが今日、ほんの少しの勇気を持って踏み出す一歩の先にある、確かな未来です。

さあ、背負い込んできた重たい荷物もう下ろして、ゆっくりと顔を上げてみてください。雨上がりの空には、もう美しい虹がかかっています。その虹の架け橋を渡り、笑顔と元気を胸に、新しい時代へと一緒に歩き出しましょう。私たち庶民が主役となり、心から楽しいと笑い合える最高の物語を作るのは、他の誰でもない、本を閉じて顔を上げたあなた自身です。

虹色の未来で、またお会いしましょう。